



柳田国男編『国語
高校一年上』所収、「随筆・随想」教材の比較に関
する考察：特に「挿話」分類について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 公開日: 2017-04-14 キーワード: 作成者: 谷口, 守 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008798

柳田国男編『国語 高校一年上』所収、「随筆・随想」教材の比較に関する考察

——特に「挿話」分類について——

谷口 守

はじめに

「浅春随筆」「大蛇・小蛇」「地図をいるどる」「ろくをさばく」は、昭和三十(一九五五)年に東京書籍株式会社が発行した柳田国男編『国語 高等学校一年上』(以下、「柳田教科書」)「一 随筆・随想」に所収された教材である。「一年上」所収の随筆は全五編で、その「目次」は次のとおりである。

- 一 浅春随筆・・・柄内吉彦
- 二 大蛇・小蛇・・・片山広子
- 三 地図をいるどる・・・楠木清方
- 四 かみなりさま談義・・・東条 操
- 五 ろくをさばく・・・三淵忠彦

今年度稿者は三学年担任で、授業は問題演習が中心のため、「柳田教科書」に関する授業ができなかった。そのため「随筆」という各教材を比較することではわからないかと考えた。「五 ろくをさばく」の後の「問題三」に、昭和三十年版「柳田教科書」では「三」に掲げられた五編の、文章上のそれぞれの特徴を述べ、比較してみよ。」とある。また、昭和三十三年版「柳田教科書」では「四つの随筆」を読んで、それぞれの特徴を比較してみよ。」とある。後者で一編減っているのは、教材の再編があったためである。その際、前者で「文章上の「特徴」とあるが、後者ではただの「特徴」になっているので、問題作成者は「文章上」に限らない随筆比較を課す意図がある

と考える。よって本稿は、授業記録ではなく、この各随筆を検討し、教材理解をより深めようと試みるものである。

なお、稿者が属する「柳田国男監修高等学校国語教科書所収教材の実験的・連携的研究」では、平成二十八年度では上記の内「一二三五」を扱うことになっているため、「四 かみなりさま談義」は参考程度の記述とする。

一 随筆

申し上げるまでもなく、「随筆」とは何かという定義づけは、既に多くの御論考で示されているが、基本を忘れずにあらためて確認したい。語彙に関する総合的な辞典では「随筆」の項に次のように述べられている。

1『大言海』。

随時ノ見聞、感想ヲ記シタルモノ。思ヒノママニ、筆記シタルカキモノ。筆ヲサミの著述。漫筆。漫録。

2『大漢和辞典』⁷

筆にまかせて何くれとなく書き記す。又、記したものを。そぞろ書き。漫録。漫筆。

3『学研国語大辞典』。

体験・感想・意見などを思いつくままに自由な気持ちで書いたもの。また、その文章・作品。エッセー。

4『言泉』。

特定の形式を持たず、見聞、経験、感想などを気の向くままに書き記した文章。エッセー。

5『講談社 カラー版 日本国語大辞典 第二版』¹⁰

筆にまかせて思うままを書いた文章。随想録。エッセー。

6『大辞林 第二版』¹¹

見聞したことや心に浮かんだことなどを気ままに自由な形式で書いた文章。また、その作品。漫筆。随録。随想。エッセー。

7『広辞苑 第五版』¹²

見聞・経験・感想などを気の向くままに記した文章。漫筆。随想。エッセー。

8『日本国語大辞典 第二版』¹³

特定の形式を持たず、見聞、経験、感想などを筆にまかせて書き記した文章。

9『大辞泉 増補 新装版』¹⁴

自己の見聞・体験・感想などを、筆に任せて自由な形式で書いた文章。随想。エッセー。

随筆に関する辞典では次のように述べられている。

10『随筆辞典 5 森銃三編 解題編』(「はしがき」より)¹⁵

そもそも随筆とは何なのか。それを厳密に定義することは困難であるが、見たこと、聞いたこと、感じたこと、考えたこと、さては調べたことなどを、前後の連絡もなく書きつらねた、短章の累積より成る著作と云って宜しかろうか。

これらのことから一般に「随筆」とは、何を…感想・見聞・経験・体験・意見・考えたこと・調べたことなどを、どのように…思ヒノママニ

思いつくままに筆にまかせて、気の向くままに自由な気持ちで、前後の連絡もなく特定の形式を持たず、どうした…筆記シタ書き記した書きつらねたものであり、別名は…漫筆・漫録・そぞろ書き・エッセー・随想録などと呼ばれるものと言えよう。

また、国語教育に関する辞典では次のように述べられている。(傍線稿者)

11『国語教育辞典』(「随筆文学」の項 中村通夫の文章による)¹⁶

自己示現の文学の一態として、筆にまかせて自由に見聞・体験・感想・批評・評論等を書き集めた文章で、人生または世界に関しての感じ方・受け取り方・作者の個性を通して述べたものである。(後略)

12『国語教育辞典』(「随筆」の項の中の「随筆の性格、特徴」として 高野保夫の文章による)¹⁷

随筆は、自由な形式で人間、社会、自然についての省察や感想を書き記した文章である。内容的には複数のジャンルと異なるものを有しており、それらの違いを厳密に分けることはむずかしいが、その性格は大きく二つに分けることができる。一つは、筆者の個人的な考えや意見を形式的に捕われずに述べた、いわゆるエッセーと呼ばれるものであり、もう一つは、日常的な出来事を筆者独自の感性によつて捕え、そこにある省察を加えた身辺雑記的な要素を持つ随想と呼ばれるものである。したがって、随筆は一方で評論文につながり、他方で小説などの文学的表現へと発展する性格を備えたものといえる。高田宏はモンテーニュの『エッセー』を踏まえながら、書かれていた事柄がたんに事柄ではなく、それが書く人の裸の生に触れているとき、論文のかたちであれ小説のか

たちであれ何のかたちであれ、それがエッセーなのであると指摘しているが、随筆の性格、特徴を考えるうえでこの点は大事なこととして押さえておきたい。

13『月刊国語教育 明日を拓く 国語科重要用語辞典』(随筆・説明文の項の中の「随筆とは何か」として 内田剛の文章による)¹⁸

随筆という文章のジャンルを明確に定義することは難しい。逆に言えば「ほかの文章ジャンルに含むことができないものが随筆である」といった方がよいかもされない。しかし、そのような広い意味をもつ随筆にも共通している点がある。それは随筆が、「筆者が形式にとらわれずに自分の思いを自由に表現した文章である」という点である。つまり、筆者の個性や表現の特性が文章に色濃く表れていることが随筆の特徴であり、その特徴を中心に据えて授業が計画されなければならない。

一般的な辞典では紙面の関係があり、短文でまとめて多くを書けないからであろうか。これらの例では「作者(筆者)の個性」「筆者の個人的な考えや意見」「筆者独自の感性」が並んでいる。以上のことから「随筆」は、「筆者」がより前面に出た、「書く人の裸の生」がにじみ出た文章であり、これをよくよく念頭に置いて取り扱わなければならないと言えるだろう。

吉田精一氏の『随筆入門』¹⁹「一、随筆とは何か」を引用し、まとめとする。

結局筆者の人的価値がそのまま作品としての価値となる、というおもむきが強いのである。だから随筆は、ほんとうをいえば青年のものではない。ゆたかな人生体験や、長い間の修行、もしくは深い趣味にうらうちされた中年以後の人の書いたものに、底光りのする人間味や、ほんとうのコクが出て来るのがふ

つうである。真にすぐれた随筆こそは、いわゆる達人の書で、他の何にもまして座右の書となり得るわけである。

二 筆者

前章では、「随筆」にとつての「筆者」の重要性を確認した。これを受けて、教科書本文頭注の筆者紹介と、関連して「語り手自称」を、「柳田教科書」をもとに以下で挙げる。なお後述では、「一 浅春随筆」(以下「浅春」または「一」)、「二 大蛇・小蛇」(以下「二蛇」または「二」)、「三 地図をいろうどる」(以下「三地図」または「三」)、「四 かみなりさま談義」(以下「四かみ」または「四」)、「五 ろくをさばく」(以下「五ろく」)または「五」と省略させていたたく。

表1 筆者職業・肩書きと、語り手自称・「私」掲載回数

	筆者名	職業・肩書き	自称
一	柄内吉彦	植物学者、農学博士	なし
二	片山広子	翻訳家・歌人	私
三	籀木清方	日本画家、芸術院会員・帝室技芸員 ²⁰	私
四	東条 操	国語学者	私
五	三淵忠彦	大審院判事、最高裁判所長官を歴任	私

はじめに、「語り手」とは、「作者」によつて設定された、出来事の筋を物語る者」で、小説の用語と把握している。「随筆」の場合、それにあたる語や他に適語を知らないで、こどもも使用させていたたくところや、「随筆」に虚構は禁止なのだろうか。前述の「随筆」の定義では明らかにされていない。仮に虚構が許されるのであれば、日

『記文学ではあるが『土佐日記』のように、第三者に仮託しての記述も可能であろう。この問題は調査していないが、既に多くの先学がご研究なされていることと想像して割愛する。ただ、前述したように、「随筆」と筆者は切り離せない関係であり、よけては通れないお題である。よって本稿では、各随筆が「語り手」による進行の文章、すなわち「語り手＝筆者」として考え、これを以下で「筆者」と記したい。

では、いよいよ「五編」を具体的に見ていく。まず表1に示したように、「一浅春」を除いて、語り手の自称は「私」と本文に記されている。「二蛇」で使用回数が多く、他はそれに比べて少ない。「一浅春」は「私」などの自称がないが、他の作品同様、「語り手＝筆者」と見て考えていく。

次に表2で、本文の冒頭部分、そこに筆者はいると読めるかいないと読めるか、内容と筆者の職業²¹との関連などを見ていきたい。

表2(傍線・波線・括弧書きは稿者による)

一浅春	冒頭・きっかけ	筆者 在・無	職業 関連	直接 体験
先ごろじゅう、夕張岳の山麓に植物採集に出かけて、三日二夜の森の中のキャンプ生活に山の春を満喫してきた。 町ではもう春たけなわというに山の春はまだ浅い。		在	◎	◎
二蛇 (前半) 日本では蛇の昔話がたくさんあるが、アイルランドの伝説にも蛇が多いようである。同じように島国のせいかもしれない。は			○	

三地図	四かみ	在	△	◎	△
<p>はじめに私が読んだのはごく太古のこと、 (後半 私の家の蛇)</p> <p>ある晩珍しく約束の客もないので、早く食事をすませてから、私は茶の間の電燈を手元近くまでおろして、大きい食卓の上にひろげた数枚の五万分の一の地形図を、赤と青の二本の色鉛筆でいろいろはじめた。 (以後 地図のいろどり)</p> <p>かみなりさまとかけて、金の鈴と解く。心はふる、鳴る、光る。江戸っ子には雷のきらいな人が多いようだ。「かみなりは鳴る時ばかりさまをつけ」というが、私も鳴らない時だつてかみなりなどと呼びすてにした覚えはない。 俚言にちなんだ随筆というがらにない注文を引き受けたのが不覚だつた。締め切りが近いのにうまい材料が見つからない、種がないのでけさからむしゃくしゃしていた。つゆに珍しく晴れながらたまらなく蒸し暑い。 午下二点、さつとかき曇ると紫電一閃、思いがけぬ霹靂だ。追っ</p>	<p>かみなりさまとかけて、金の鈴と解く。心はふる、鳴る、光る。江戸っ子には雷のきらいな人が多いようだ。「かみなりは鳴る時ばかりさまをつけ」というが、私も鳴らない時だつてかみなりなどと呼びすてにした覚えはない。 俚言にちなんだ随筆というがらにない注文を引き受けたのが不覚だつた。締め切りが近いのにうまい材料が見つからない、種がないのでけさからむしゃくしゃしていた。つゆに珍しく晴れながらたまらなく蒸し暑い。 午下二点、さつとかき曇ると紫電一閃、思いがけぬ霹靂だ。追っ</p>	在	△	◎	△

五ろく	か けて沛然たる豪雨だ。「ふる、 鳴る、光る」が「光る、鳴る、落ち る」になる。この中でふと思いつい たのが、この「かみなりさま」談義 である。 (以後、雷の俚言)		
	徳川二代の将軍秀忠は、ある 時、御側用人の永井日向守に、 「おまえは天下の裁判と、奉行の 裁判との差別を知っているか。」と 尋ねた。(中略)		
	ろくをさばくというろくというの は、いかなる意味のことばか、私に はわからぬ。	△	
			◎
		△	△

表3 筆者の五感体験数(空欄は0を示す)

五	四	三	二	一	五感	視覚※	聴覚	触覚	嗅覚	味覚	備考
ろく	かみ	地図	蛇	浅春	複数	6	2	1	1	22	備考
少数	1										(後半)家の蛇のみ
											冒頭付近のみ

※「視覚」は「見る」など視覚動詞がなくても、筆者が眼目する以外は常に何かが目に入るという前提でこう示した。「四」「五」は筆者体験が、他に比べ極端に少ないため「少数」と記した。

まず表2について見ていきたい。「筆者在無」は、筆者が直接登場しているか、否かについてである。前述したように「語り手≡筆者」な

のだから、全ての本文で筆者が存在するという考えもあるかもしれない。しかし、例えば表2「五ろく」の冒頭だけ見たならば、「將軍秀忠」の小説のように思える。よって、ここでは筆者の存在が感じられるところ、すなわち「私」という語、または「筆者≡語り手」の思考・感覚・行動などの有無を根拠に判断した。ただし「浅春」については、これも前述したように、「私」が筆者の自称として使われていないことから、「筆者≡語り手」の思考・感覚・行動などがあつた時点で筆者が存在すると見なした。また、「二蛇(前半)」²³や「五ろく」は、「私」が一部にしか出てこなかったため、「△」と判断した。他は概ね筆者が文中に存在すると読めた。

次に、「職業関連」の「◎」「○」「△」の違いを説明する。「浅春」では、「植物学者」を職業とする筆者が「夕張岳の自然」に関する随筆を書き、「四かみ」では「国語学者」を職業とする筆者が「雷の俚言」に関する随筆を書き、「五ろく」では「裁判所長官」を職業とする筆者が「裁判」に関する随筆を書いた。そういう意味で各随筆と筆者の職業とのつながりは強いと判断され、「◎」とした。

それに比べて「二蛇」では、「翻訳家・歌人」を職業とする筆者が「蛇」に関する随筆を書いた。「アイルランドの伝説・聖書・日本の伝説」を(前半)とすると、筆者にとつて特別な思いのある²⁴アイルランドの伝説を翻訳し、まとめた²⁵ものが一部含まれるであろうという意味で「○」、「私の家の蛇」を(後半)とすると、職業との直接の関係性をほぼ見出せないため「△」とした。「三地図」では、「画家」を職業とする筆者が、「地図や、関東地方の河川や湖沼」に関する随筆を書き、職業との関係性をほぼ見出せないという意味で「△」にした²⁶。

分けづらかったのが「直接体験」だが、「◎」をつけた「浅春」「二蛇(後半)」²⁷「三地図」では、それぞれ筆者自身の体験が直接綴られている。また、「四かみ(冒頭付近)」では、筆者の執筆がうまく進ま

ない思いや雷雨の体験などがあるが、少数と見なし「○」とした。「二蛇」の「蛇の昔話・「四かみ」の「雷の俚言」・「五ろく」は、ともに筆者の思考・感覚・行動などがくわずかしくないため、「△」とした。「視覚」は、表3の「※」で書いたように、厳密な数は数えられないという意味で記した。「聴覚」は、「一浅春」で鳥の鳴き声に関する複数の箇所のはかは見つけられなかった。「触覚」は、「一浅春」の、「雪解けの水が冷たい」、トカゲが「指の腹に食いつく」ところと、あえて挙げれば「四かみ」の、「蒸し暑い」というところ以外は見つけられなかった。「嗅覚」「味覚」は、「一浅春」の、紅かのこの新芽が「かおりが高くて」「珍珠」という箇所以外は見つけられなかった。

三 分量 くに「挿話」を中心に

「五編」の、それぞれの教科書本文における分量の比較について、次表で見えていきたい。

表4

	頁数	行数	挿話	挿絵図等	段落	頭注	問題
一	浅春	47	6	2(植物4)	6	13	4
二	蛇	106	9	0	13	29	4
三	地図	79	7	2(地図2)	15	29	3
四	かみ	93	9	1(優名抄)	21	13	3
五	ろく	68	4	0	12	11	3

「頁数」は、各章末の「問題」を含め、教科書の紙面の何頁にまたがっているかで数えた。

「行数」は、題名や筆者名、出典を除いた教科書本文のみとした。

挿絵や図が文中にあると、行数が多くても字数が少なくなることに注意されたい。よって挿絵や図がなく、一番多く行数のある「二蛇」が、他に比べて字数がより多いことがわかる。以下は字数の多いものから順に「四かみ」「五ろく」「三地図」「一浅春」となる。「三地図」は、頁数や行数が多い割には地図が挿入され、「五ろく」より字数が少ないことがわかる。

「挿話」とは、辞書²⁸によると「エピソード①②」を見よとあり、「エピソード」には①ある作品にはめこまれた、本筋とはあまり関係はないが、それなりにまとまった話。挿話。②ある事柄について、それを具体的に示す、ちよとした出来事。また、その話。」とある。ここでは②の意味でとっていただきたい。「挿話」の意味を①の意味のように、「本筋とはあまり関係はない」と解する方がいるかもしれぬが、他の適当な熟語を知らぬためお許しいただきたい。さて、各随筆に幾つ挿し挟まった話があるかだが、稿者の判断による数え方であり、どれを一つと数えるか切り方が明確でないものもある。また、各々長いものもあれば短いものもある。詳しくは後述したい。

「段落」は、形式段落の数である。「頭注」は、筆者・出典に関わるものを除き、本文に関するもののみを対象とした。なお、「五ろく」の問題は、前述のとおり「問題三」が全随筆比較に関する問題なので、実質②である。

では、「挿話」と、その分類を次表で見えていきたい。但し、「分類」と言っても、学術論文で使用されるような厳密な意味ではなく、仮に区分するとしたら、何に関連した挿話かという程度で把握していただきたい。

表5

一浅春	挿話	分類
*	①山菜 ②魚類両生類 ③爬虫類	生物

29	④鳥類 ⑤落葉喬木 ⑥山と浮世	
二蛇 30	①シヤノン河 ②セント・パトリック * ③八岐大蛇 ④大物主神 ⑤勇将田道 ⑥藤原道長 ⑦北条時政 * ⑧旧約聖書 ⑨私の家の蛇	西洋文学 日本史 日本古典
三地図 31	①いろどり開始 ②水流 ③湖沼 ④葛飾の里 ⑤江戸名所図会 ⑥権現堂の堤 ⑦中川の野趣	地理
四かみ 32	①執筆思索 ②かみなり ③ナルカミ ④カンダチ ⑤シグレ ⑥イカツチ ⑦アマル ⑧擬音語から ⑨字音から *	国語学
五ろく 34	①徳川秀忠 ②新井白石 ③横田国臣 ³³ ④実情実際の裁判を	法学 日本史

教科書掲載順に並べたが、「*」は、挿話に入れていくと判断した箇所を指す。

挿話の内容は、比較的人文科学・社会科学系統、いわゆる文科系が多いことがわかる。また、「生物」(一)、「二」(「河川湖沼」(二)、「三」)など目に見えるもの、形として想像しやすしい具象から、「言語」(四)、「裁判」(五)など目に見えず、形を持たない抽象へという流れが読みとれる。これは、高校一年という学習段階、教科のはじめの入りやすさなどから、学習者の興味関心を考慮したためだろう。

また、「随筆」と言えば、『枕草子』が有名であるが、その特徴の「物尽し」がある。仮に「一浅春」「二蛇」「四かみ」を、それぞれ筆者による「春の動植物」「蛇説話」「雷の俚言」の「物尽し」とすると、当時の各地に住む高校生がそれらを挙げるとする何を答えるかを問うに相応しい内容が、各随筆にあると考えられないだろうか。戦後、郷土の自然破壊、親から子へ子から孫への口承文学の

断絶、交通通信や報道機関の発達による、俚言方言の減少消滅など、急速に変化する日本を危惧した意図がそこにあったのかもしれない。参考までに「一」「二」「四」に用意された「問題」³⁵とその問題番号を表6として掲載する。

表6

一浅春	四 春の訪れを知らせる各自の地方の動植物を考 え、文章に書いてみよ。 ³⁶
二蛇	三 各自の知っている動植物説話をあげてみよ。 ³⁷
四かみ	二 各自の地方で特徴的な俚言といわれているものをあげてみよ。 ³⁸

四 「挿話」分類

「一 筆者」で、各随筆の冒頭部分と、筆者について「在・無」「職業関連」「直接体験の有無」の検証をしたが、それを各随筆全体で試みたい。その際、全文掲載は紙面に限りがあるので、表5の「挿話」を使ってまとめてみた。つまり、表2の冒頭検証を、全文で行った結果を表7となる。その上で各随筆の「挿話」を分類し、特徴を比較したい。

表7

一浅春	挿話	筆者	職業	直接	挿話分類
②魚類両生類	* ①山菜	在	無	無	在
③爬虫類		◎	◎	◎	◎
		◎	◎	◎	◎
					職業体験型挿話

「三地図」では、「珍しく約束の客もいないので」、「興味のある「東郊葛飾一帯」や「中川の川筋」をまさに自由に自由に述べている。「やつている当人にしてみれば、ただ単に気まぐれなもの好きでばかり」という「わけでもないのかもしれないが、「日本画家」という職業からは、本人の言葉どおり「およそ似つかわしくないものにはちがいがあまい」。筆者の思ひは、回想や想像など様々に散見でき、その強弱は見分け難い。ただその中で「閑宿まで行ってみたい」「権現堂の堤、どんなところだかそれが見たい」「中川となつて放水路に落ちあうまで、この川筋に興味がかれる」と、結末近くに立て続けの「願望」「興味」が三箇所あり、ここに、より強意を感じる。そういう意味で、余暇をきつかけに筆にまかせて「地図をいろう」と、「興味体験型」とでも言つた「挿話」を並べ、結末で未見の地「閑宿」「権現堂の堤」「中川」へ思ひを馳せていると読めないだろうか。

「四かみ」については、まだ内容の詳細には触れないが、「不覚だつた」「うまい材料がみつからない」「種がないのでけさからむしやくしやしていた」などの記述から即動機が不純だとするのは早計であろう。昨今の学習者が誤解しそうな箇所であるので、それは学者先生ならではの御多忙時の御謙遜であることを断つておく。ここでは、「国語学者」という職業のために「俚言にちなんだ随筆」の「注文」を受け、それをきつかけとして全国各地から聞き集めた俚言を並べて随筆を書いたとらえておきたい。また、「挿話」という名に若干違和感があるが、その種類毎の俚言を、他の随筆にそらえて「職業伝聞型挿話」と名付けておく。

「五ろく」は、「最高裁判所長官」を経験した筆者の、徹頭徹尾「裁判」に関する文章である。その執筆動機は明確に書かれていないが、「実情実際」という語が本文に九回使われていて、⁴²裁判において「実情、実際に即せざる結果が往々にして現れ」ている反動・反省から書かれたと推定できる。但しそこには、抽象的になりすぎぬよ

うに、「職業」に關した具体的な「伝聞型」「挿話」を並べてわかりやすく説明している。そして、法によつて杓子定規に裁くのではなく、「法律による裁判」には「長所があるとともに、短所もまた存在」し、「実情実際に即した、よき裁判をするように心がけたい」という謙虚な思ひで結末が締め括られている。

結語

「随筆」で大事なことを二つ申し上げた。一つは、「筆者」である。筆者の存在が認められるか否か、職業と本文の関係、直接体験か否かなどに關して考えた。

もう一つは、随筆内に複数の「挿話」とでも言うべき小話があり、それらが筆者の思ひへ直接間接に關連していたり、またそれら自体が筆者の思ひだつたりすることである。「随筆」には様々な形態があり、全てが今回のようにはいかないだろうが、「筆者」や「挿話」を意識することで見えてくることがあると学んだ。

さて、最後になつてしまつたが、そもそも授業で「随筆」ばかりを「五編」も扱い、さらにそれを比較する時間などあるのかという根本的な問題がある。ここでは仮に時間が取ればという前提で進めたが、実際にするにしても、短時間で進まなければならぬだろう。本稿の目的は、「五編の」「特徴を述べ、比較してみ」ることであつた。なるべく学習者視点で教科書本文から逸脱しないように努めたつもりだが、これらを学習者が短時間で導き出すのは無理があると考え。よつてこの小稿は、教材理解の一助にでもなれば幸いである。切り口を変えて本文を観るとまだまだ見落としたことがあるに違いない。今後も勉強させていただければと思つている。

- 1 本橋幸康がこの問いに触れている。(昭和三十年代における柳田国男編『国語』(高等学校国語教科書)にみる学習指導観)『国語論集12』北海道教育大学釧路校 国語科教育研究室 平成二十七年(二〇一五年) 四一―四十一頁)
- 2 柳田国男編『国語 高等学校一年上』(東京書籍株式会社 昭和三十一年(一九五五年)を用いた。
- 3 佐野比呂己が「教材」ろくをさばく(考)8)『北海道教育大学紀要(教育科学編)第六十二卷第二号 別刷』北海道教育大学 平成二四年(二〇一二年) 八頁)で指摘している。
- 4 「四つの随筆」とは、「一 浅春随筆(枅内吉彦)」「二 大蛇・小蛇(片山広子)」「三 紙(幸田文)」「四 ろくをさばく(三淵忠彦)」と佐野比呂己が「教材」大蛇・小蛇」考(1)『釧路論集』第四十号 北海道教育大学釧路校 平成二二年(二〇〇八年) 八頁)で指摘している。
- 5 「随筆に関するものでは、大村勅夫「随筆を読む」ことの単元の考察」もの見方・感じ方・考え方を豊かにする指導」『国語論集13』平二八年(二〇一六年) 北海道教育大学釧路校 国語科研究教室 一四一―一四八頁)がある。
- 6 『大言海』(大槻文彦 富山房 昭和八(一九三三年) 九四三―九四九頁)
- 7 『大漢和辞典』(諸橋轍次 大修館 昭和三十四(一九五九年) 卷十一 九六四頁)
- 8 『学研国語大辞典』(金田一春彦 池田弥三郎 学習研究社 昭和五十三(一九六三年) 一〇〇九頁)
- 9 『言泉』(林大監修 尚学図書言語研究所編集 小学館 昭和六十一(一九八六年) 一二三頁)
- 10 『講談社 カラー版 日本国語大辞典 第二版』(梅棹忠夫 金田一春彦 阪倉篤義 日野原重明監修 平成七(一九九五年)年 講談社 一〇二四頁)
- 11 『大辞林 第二版』(松村明監修 三省堂 平成七(一九九五年)年 一三二六頁)
- 12 『広辞苑 第五版』(新村出編 岩波書店 平成十一(一九九九年) 一四一〇頁)
- 13 『日本国語大辞典 第二版』(日本国語大辞典第二版編集委員 小学館国語辞典編集委員会 平成十三(二〇〇一年) 第七卷 八〇六頁)
- 14 『大辞泉 増補 新装版』(松村明監修 小学館 平成二四年(二〇一二年) 一四〇七頁)
- 15 『随筆辞典5 解題編』(森銑三編 東京堂 昭和三十六(一九六一)年 六頁)
- 16 『国語教育辞典』(西尾実 倉沢栄吉 滑川道夫 飛田多喜雄 増淵恒吉編集 朝倉書店 昭和三十一(一九五六)年 出版 平成十三(二〇〇一年)復刻 三八八―三八九頁)
- 17 『国語教育辞典 新装版』(日本国語教育学会編集 朝倉書店 平成二一年(二〇〇九年) 二二九九頁)
- 18 『月刊国語教育 明日を拓く 国語科重要用語辞典』(月刊国語教育2009年5月号別冊 東京法令出版 平成二二年(二〇〇九年) 六二頁)
- 19 『随筆入門』(吉田精一 河出書房新社 昭和三十六(一九六二年) 十一頁)
- 20 旧制で、皇室の美術・工芸品に関する制作の御用を勤める美術家。勅任官待遇。『日本国語大辞典』(日本大辞典刊行会 小学館 昭和五十二(一九七五年) 一六二頁)
- 21 各筆者の職業は、以下に詳細が述べられている。
○枅内吉彦(枅内吉彦「浅春随筆」をめぐる)『国語論集8』北海道教育大学釧路校 国語教育研究室 平成二十三

(二〇一一年 一九九—二〇一頁)

○片山廣子(片山廣子)『燈火節』をめぐって『北海道教育大
学紀要(教育科学編)第五十八卷第二号』北海道教育大
学 平成二十(二〇〇八)年 一—三頁

○鐘木清方(教材)「地図をいろどる」考(一)、『釧路論集』第
四十二号 北海道教育大学釧路校 平成二十(二〇〇八)
年 二—七頁

○東条操(教材)「かみなりさま談義」考(一)、『釧路論集』第
四十二号 北海道教育大学釧路校 平成二十(二〇〇八)
年 二—五頁

○三淵忠彦(教材)「ろくをさばく」考(一)——三淵忠彦を中心
に『北海道教育大学紀要(教育科学編)第五十九卷第一
号』北海道教育大学 平成二十(二〇〇八)年 一頁—
六頁

³² 「五感」については、佐野比呂己が以下で指摘している。(「枅内
吉彦「浅春随筆」をめぐって」『国語論集』8 北海道教育大
学釧路校 国語教育研究室 平成二十三(二〇一一年) 二
一頁—二〇頁—二二頁)

³³ 佐野比呂己が「大蛇・小蛇」の「前段、後段」について述べ
ている。(教材「大蛇・小蛇」考(一)、『釧路論集』第四十号
北海道教育大学釧路校 平成二十(二〇〇八)年 八頁)

³⁴ 佐野比呂己が「大蛇・小蛇」筆者の、「アイルランド文学
翻訳家としての経歴を述べている。(片山廣子)『燈火節』を
めぐって」『北海道教育大学紀要(教育科学編)第五十八卷第
二号』北海道教育大学 平成二十(二〇〇八)年 六頁—
八頁)

³⁵ 「二」大蛇・小蛇「は、教科書本文二十六行に渡ってアイルラ
ンド伝説の要旨があるが、大半が日本の伝説や筆者の体験談

である。

³⁶ 筆者が画家という関係からか、教科書本文では「北斎」や「江
戸名所図会」に触れている。

³⁷ 佐野比呂己が「大蛇・小蛇」について、「遠い國の話から身近な
話へ、昔の話から最近の話へ、文献等からの伝聞から実体験へと
話が流れている」と指摘している。(教材「大蛇・小蛇」考(2)「
『北海道教育大学紀要(教育科学編)第五十九卷第二号』北
海道教育大学 平成二十一(二〇〇九年) 一—三頁)

³⁸ 『国語大辞典』尚学図書編集 小学館 昭和56(一九八
一)年 一三—九頁)

³⁹ 佐野比呂己が「浅春随筆」の「文章構成」を述べている。
(「枅内吉彦「浅春随筆」をめぐって」『国語論集』8 北海
道教育大学釧路校 国語教育研究室 平成二十三(二〇〇一
一)年 二—〇頁—二—一頁)

⁴⁰ 佐野比呂己が「大蛇・小蛇」の「文章構成」を述べている。
(教材「大蛇・小蛇」考(一)、『釧路論集』第四十号 北海道
教育大学釧路校 平成二十(二〇〇八)年 七—八頁)

⁴¹ 佐野比呂己が「三」地図をいろどる」の「文章構成」を述べてい
る。(教材「地図をいろどる」考(3)「『北海道教育大学紀要
(教育科学編)第六十三卷第二号 別刷』北海道教育大学
平成二十五(二〇一三年) 九頁)

⁴² 佐野比呂己が「四」かみなりさま談義」の「文章構成」を述べ
ている。(教材「かみなりさま談義」考(3)「『国語論集』1『
北海道教育大学釧路校 国語教育研究室 平成二十六
(二〇一四年) 七五—七六頁)

⁴³ 参考までに、「横田国臣」について教科書掲載の注を挙げる。
「一八五〇—一九二三」法学博士。民法・刑法の改正に尽力
して功績があった。」

³⁴ 佐野比呂己が「四　ろくをさばく」の「文章構成」を述べてい

る。「教材」ろくをさばく(考)(6)、『北海道教育大学紀要(教育科学編)第六十一巻第二号 別刷』北海道教育大学 平成二十三年(二〇一一年) 七頁)

³⁵ 「問題」について、本橋幸康が「教材で学んだ内容をもとにして自分の経験や知識と結びつけたり、調べ学習へと学習を展開させるような問い」と指摘している。(昭和三十年代における柳田国男編『国語』(高等学校国語教科書)にみる学習指導観『国語論集1・2』北海道教育大学釧路校 国語教育研究室 平成二十七年(二〇一五年) 六頁)

³⁶ 「一　浅春随筆」の「問題四」について、佐野比呂己が「身近な自然に目を向けさせるという点で、地方を重視する柳田国男の考えが反映された教材選択であるといえよう。」と指摘している。(枅内吉彦「浅春随筆」をめぐって『国語論集8』北海道教育大学釧路校 国語教育研究室 平成二十三年(二〇一一年) 一二二頁)

³⁷ 「二　大蛇・小蛇」の「問題三」について、佐野比呂己が「身近な動物説話について取り上げさせようとする取り組みは、学習者にとって地域を見つめなおす契機となるものである。柳田監修国語教科書の特徴が表れている部分である。」と指摘している。(教材「大蛇・小蛇」考(2)『北海道教育大学紀要(教育科学編)第五十九巻第二号』北海道教育大学 平成二十一年(二〇〇九年) 一四頁)

³⁸ 「四　かみなりさま談義」の「問題二」について、佐野比呂己が「地方、地域の言語文化について、興味を持たせるねらいがある文章にとどまるのではなく、自分の身近なものに注目させている。柳田らしさが出ていると言つてよいだろう。学習者には、語の形成について考えさせたい。歴史的視座からもとらえさせた

いとろである。言語感覚が豊かになり、古典を学ぶ意義を考

えさせることにつながる。」と指摘している。「教材」かみなりさま談義(考)(5)『国語論集1・3』北海道教育大学釧路校 国語教育研究室 平成二十八年(二〇一六年) 二九頁)

³⁹ 佐野比呂己が「一　浅春随筆」について、「第一段落から第五段落はあくまでも第六段落の主題を導くためのものであると考えるのである」また、「山の春、自然とのふれあいを通して、浮世、現実世界の「我執獨善のあさましい迷妄に随して、他を苦しめ、自ら悩む人間」が対照的に見えてくる」と述べている。(枅内吉彦「浅春随筆」をめぐって『国語論集8』北海道教育大学釧路校 国語教育研究室 平成二十三年(二〇一一年) 一二二頁)

⁴⁰ 佐野比呂己が「大蛇・小蛇」の主題について「この随筆の主題を筆者の家の主である蛇を恋しく感じることとすれば、」と述べている。(教材「大蛇・小蛇」考(2)『北海道教育大学紀要(教育科学編)第五十九巻第二号』北海道教育大学 平成二十一年(二〇〇九年) 一四頁)

⁴¹ 佐野比呂己が「三　地図をいろどる」の筆者の思いについて、「最後の一文こそが清方の愛する東郊であり、まだ見ぬ土地がゆかしく思われるのは東郊の風景がそこに見られると想像するからである」と述べている。(教材「地図をいろどる」考(5)『北海道教育大学紀要(教育科学編)第六十三巻第二号 別刷』北海道教育大学 平成二十五年(二〇一三年) 九頁)

⁴² 「ろくをさばく」教科書本文には、正確には「実情実際」が八回、「実際、実情」が一回使われているが、同類と見なし合わせて九回と数えた。

(たにぐちまもる／北海道札幌啓成高等学校)